

地域コミュニティの 防災力

連載 第41回

災害時要配慮者の支援体制づくりに向けて



常葉大学大学院 環境防災研究科 教授
重川 希志依

平成25年6月の災害対策基本法の一部改正により、高齢者、障害者、乳幼児等の防災施策において特に配慮を要する方（要配慮者）のうち、災害発生時の避難等に特に支援を要する方の名簿（避難行動要支援者名簿）の作成を義務付けること等が規定されました。また、この改正を受け、避難行動要支援者名簿の作成・活用に係る具体的手順等を盛り込んだ「避難行動要支援者の避難行動支援に関する取組指針」が公表されています。

要配慮者の避難行動支援を具体的に担う主力となるのは、要配慮者の家族や地域コミュニティとなりますが、名簿の管理や個人情報保護の問題、さらに支援者への協力依頼や支援のためのマッチングなど、町内会や自主防災組織の会長さんたちは大きな悩みを抱えています。この課題に取り組むために千葉県では県内の自主防災組織のリーダー等を対象とした研修会を実施しています。

研修会では、平成26年8月に発生した広島市

土砂災害を経験した住民の方たちの詳細な災害対応を記録したテキスト「読み物による災害の追体験（災害エスノグラフィー）：日本赤十字社作成」を使い、土砂災害時の緊急避難やその後の避難所生活でのリアルな状況を追体験してもらいました。その後、災害時の避難行動支援体制を作り上げていくために、①支援者となる地域住民に期待すること、②要配慮者に期待すること、の2つの視点から参加者全員で意見を出し合い話し合ってもらった結果を以下にまとめてみます。

1. 助ける側、助けられる側に関係なくすべての住民がやるべきこと

『今までなかったから、私の身には起こったことがないからなど、なんの根拠もない自信や思い込みを捨ててもらいたい』

地球温暖化の影響かもしれないが、これまで生きてきた50年・60年の過去の経験では予想もできないような事態が現実になっている。

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

自分が住む地域はもともと沼地を埋め立てた場所で、時間雨量50ミリしか排水能力がない。今では50ミリを超える豪雨が全国どこでも、しょっちゅう起こるようになった。過去の経験ではどうだったから・・・はもう当てにならないということを肝に銘じておくべきだ。災害はどこでも起こるという意識のもとに、他人ごとになってしまっている災害に我がこと意識を持ってもらいたい。

『口をあけて助けを待っているだけではだめ。自分も努力することを忘れてはいけない』

災害発生時の緊急事態では、誰かが自分の生命を守ってくれるわけでは決してない。昔と違い、現在では様々な情報網から情報を得ることができるし、避難行動のタイミングを判断する指標がたくさんあるのだから、すべての人たちに判断してもらいたい。避難行動と一言で言っても、地震、豪雨、津波、すべて避難の方法が異なる。漠然と避難行動支援体制をつくるというのではなく、こういう判断でこう行動するということを考え、いつでもそう動けるように災害発生時の対応を日ごろから考えておいてもらいたい。

2. 地域住民に期待すること

『挨拶からはじまるお付き合い、「八つ橋作戦』』

まず自分から挨拶をはじめ、しかし相手に見返りは求めない。昔は皆そうしていたけれど、どこかに出かけたらちょっとした物で良いからお土産を買って帰りお隣さんに差し上げる。でも見返りは求めない。そこから向こう三軒両隣のお付き合いがはじまる。ほんのちょっとした物でも、いざという時に助けてもらえるのなら、命の値段に比べれば安いもの。八つ橋作戦と呼

んでまず自分から実行していきたい。

自分の町内会は641世帯の自治会で、こんなに沢山の世帯があると自治会役員や決められた支援者だけで要支援者を助けるということではできない。両隣同士とつながっていれば、1軒に対して2人が見守ってくれていることになる。まず「両隣に声掛け運動」をやりたいと思う。その結果として地域全体の付き合いにすることができる。

『マスコミ報道で知る災害像は限定的。被災することのリアルな真実を知り、そのうえで自分たちで考え、判断してもらいたい。』

きっかけがないと地域の防災訓練になかなか参加してもらえない。企画する側も努力するが、「命を守ること」がいかに大切かを、まず住民に知ってもらうことから始めたい。土砂災害が起こった時には石や木がこすれて焦げ臭いにおいがすることを、体験談を読んで初めて知った。音や匂いなどの前触れに敏感になるなど、そういうことを知って皆に準備してもらいたい。

避難所の運営訓練にしても、机上の議論だけでは足りない。実際の災害時に小学校の避難所では、子供用のトイレで個室が狭く、和式便器も小さなサイズのものだった。そのためお年寄りが使うことができなかったということなど、実際の場所に行って皆で体験してみることが大切。避難所は決して恵まれた状況ではない。避難生活には不自由さがあるって当たり前なんだと覚悟をする。

『各家庭で冷蔵庫に個人情報管理』

町内会として各世帯の名簿や各家庭にある救助用資器材の保管を把握して一覧表を作っておきたいと考えているのだが、個人情報の開示を拒む人もいてなかなか難しい。町会全体で皆の

命を守り合いたいと考えているのだから、理解をしてもらいたい。向こう3軒両隣、世帯主や家族構成が分かればよいが、それはハードルが高く実現することはほぼ不可能。しかし各家庭で冷蔵庫の中にそういう情報を入れておいてもらえば、いざという時に役立つと思う。

『要配慮者への声かけは漠然とでなく具体的に にする』

支援が必要な人に「大丈夫ですか」というと「大丈夫です」といわれる。しかし「大丈夫ですか」と漠然と聞くと、相手も答えようがない。もっと具体的に「一人で立てますか、歩けますか、〇〇小学校まで歩いて避難できますか」という声かけをしてもらいたい。そうすると相手も、何が難しいかイメージがわくし、支援をお願いしたい具体的なことを認識することができる。

3. 要配慮者に期待すること

『要配慮者自身が助かりたい、生きていきたい、 助けてほしいという気持ちを持つことが重要』

要配慮者自身にこの気持ちが無ければ、日ごろから支援の体制を作ろうと努力していることが身を結ばない。救助者も災害に巻き込まれてしまう可能性もあるわけだから、助けてくれる人に感謝の気持ちを持ち、自分でできることは自分で準備してもらいたい。

後期高齢者の独居世帯に支援を申し出に出向いても、何しに来たと怒られることがあるが、そういうことは避けてもらいたい。例えば足が不自由であっても避難時には玄関まで出てもらうなど、助けてもらうばかりではだめで、日ごろから自分には何ができるのか、備えをしておいてもらいたい。

避難所のリアルな実情を知れば、要配慮者が避難所で生活することは難しいことが理解できるはず。現実にならぬ時に、自分はどうすればよいのか、それを考えることができるようになると思う。

『お互い様だよということを知ってもらいたい』

「助けてほしい」を言えない人もいる。でも、今はあなたが要配慮者かもしれないけれど、いつ何時わたしが要配慮者になるかわからない。お互い様なんですよということを知ってもらいたいし、だから遠慮しないで言ってください、情報も開示してくださいと言いたい。

日ごろから要配慮者の避難体制づくりに奔走する町会や自主防災会のリーダーの皆さんが、今回の研修会を通してこのような提案をしてくださいました。「地域の防災力＝地域のきずな」であることを、改めて認識することができた、有意義な研修会となりました。